

# 特集

## 特集／エンパワーメント再考

### 農村女性のエンパワーメントとエンパワーメント評価——南米パラグアイにおける生活改善プロジェクトの事例から考える

藤掛洋子

#### ●はじめに

本稿では、パラグアイの農村女性が自律的に展開した生活改善プロジェクトを一九九三～二〇〇四年まで追うことを通し、開発実践が行われている対象地域（本稿では「農村」）で生きる女性、そして男性たち（「農村」）のような事象をエンパワーメントと捉えているのか、そして個人やグループのエンパワーメントが対象地域のジェンダー関係をどのように変革しているのか、人々の語りと実践から考えてみたい。

#### ●パラグアイの概況

パラグアイの総人口は五二〇万人であり、その内農村人口は二二五万人（四三％）である。

国民の九七％がメステイソであり、九〇％は宗主国スペインの影響を受けたカトリックである。農村にはマチスモ（男性優位）思想やマリアニスモ思想（女性は夫や家長に従順であるべしという考え）が根強く残り、また性分業も存在する。農村では、家計管理は男性が行うものとされ、女性が

家計管理を行うと「男のような女」(mujer-  
caso) 雄鶏のような雌鳥」と揶揄されてきた。このような考え方はマチスモ、マリアニスモ思想により強化されてきた。

公用語には、スペイン語と先住民の言語グアラニ語が定められているが、農村では日常生活にグアラニ語を用いる人々が多い。また、農村人口の約半数が貧困状態にあるといわれている。さらに、グアラニ語のみを話す女性／世帯の合計特殊出生率が高いという研究もある。

#### ●S村の女性たちの生活改善プロジェクトとエンパワーメントの諸過程

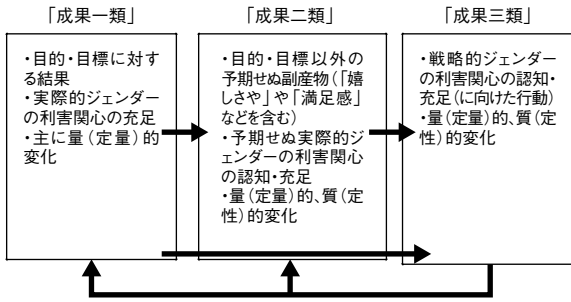
一九六〇年代より、農牧省農業普及局(MAG/DEAG)は、一部の農村で生活改善プログラムを展開してきた。カアグアス県コロネル・オビエド(以下、オビエド)市域は、MAG/DEAGが中心となり、生活改善プログラムを長く展開してきた地域の一つである。

本稿で扱う事例村S村は、オビエド市街地より三四キロ離れ、一部の道路が未整備

であることと、MAG/DEAG普及員の数が不足していることから、生活改善プログラムは展開されてこなかった。

S村の女性たちは、一九九三年にオビエド市域で展開されていた生活改善プログラムの一環である「野菜消費拡大プロジェクト」の存在をラジオと噂話を通して知った。S村の女性グループのリーダー、マリア(仮名)は、当該プロジェクトの担当者であった私(当時、国際協力事業団青年海外協力隊隊員)に一九九三年一〇月、男性の農業改良普及員を介して手紙を届けた。このことをきっかけに、私はS村に向き、一九九四年一月より一九九五年二月まで、S村の女性たちを対象に「生活改善プロジェクト」を支援することとなった。生活改善プロジェクトとは、①野菜消費拡大プロジェクト、②ミタイロガ (mitai roga) Ⅱ グアラニ語で子どもたちの場所。のちに幼稚園になる) 設置・運営プロジェクト、③ジャム加工場設置・運営及び加工食品の販売プロジェクトの三つを総称したものである。S村の二〇名の女性がプロジェクトの主たるメンバーとなった。

図2 成果三類型



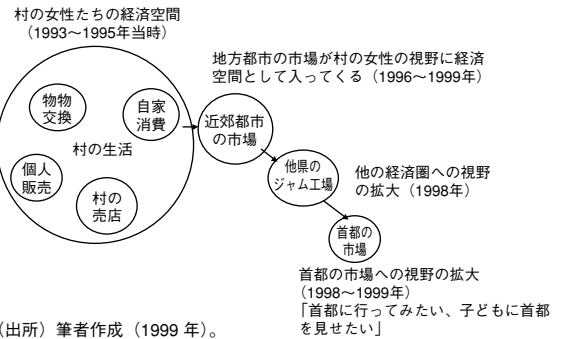
エンパワーメントの過程⇒ (出所) 筆者作成 (1999年)。

「成果一類」  
 ・目的・目標に対する結果  
 ・実際のジェンダーの利害関心の充足  
 ・主に量(定量的)的变化

「成果二類」  
 ・目的・目標以外の予期せぬ副産物(「嬉しさや」や「満足感」などを含む)  
 ・予期せぬ実際のジェンダーの利害関心の認知・充足  
 ・量(定量的)、質(定性)的变化

「成果三類」  
 ・戦略的ジェンダーの利害関心の認知・充足(に向けた行動)  
 ・量(定量的)、質(定性)的变化

図1 S村の女性たちの経済活動空間の変容



(出所) 筆者作成 (1999年)。

S村には子どもが一〇人以上いる世帯(未婚の母を含む)もあり、多くは生活に困窮していた。しかし、村の女性たちは、私が支援に入った当時、受胎調節などには関心を示さず、衛生教育や栄養教育、ジャム作り、キッチンガーデン作り、村の子どものための学校(町の子どものためのようにスペイン語が学べる場所)建設など、女性や母親としての役割を充足するための生活改善を望んだ。

女性たちは、目の前にある関心事項、すなわちモリニューのいうところの実際のジェンダーの利害関心(以下、実際の利害関心)に興味を示し、女性/男性の解放やジェンダーの平等を目指した戦略的なジェンダーの利害関心(以下、戦略的利害関心)には興味を示さなかった。

受胎調節を望まなかったのは「Hasta que Dios diga basta」(神が十分とおっしゃるまで)子どもは授かり続けるもの、「家族計画は神の意思に背くもの」といった言説が村社会にあつたからである。

一九九五年二月に私の支援は終了したが、女性たちは自律的に生活改善プロジェクトを実施していく過程で、村から町へ、そして首都へと活動空間を広げていった(図1参照)。その過程で、性分業の変革をなし得た。野菜を首都の市場へ卸したり、近郊都市の市場や青空市で産地直送販売を行ったりするなど、これまで男性の仕事と考えられていた換金作物の販売を女性たちが担

い始めたのである。女性たちは市場経済に関わることを通し、自身で稼いで、自身で管理できる現金を獲得していった。

村の女性たちは、「野菜の販売活動を始めて、女性にもお金を扱う権利があると気付いた」、「昔は家の周りから外へは一歩も出なかったが、誘われて市場に行つてかぼちゃを売ることができ、大変嬉しかった」など、語り始めた。また、女性たちは、プロジェクトへの参加をきっかけにこれまで接触のなかった村の他の女性たちと交流するようになり、色々な話をするようになった。それらには、日常の些事、プロジェクトで学んだ野菜料理の方法、新たな野菜の栽培方法、どのような野菜がどの時期に市場で高く売れるか、といったことから、これまで村でタブーとされていた家族計画にまで及んだ。

そして女性たちは、村社会でしばしば語られてきた「Hasta que Dios diga basta」や「家族計画は神の意思に背く」といった言説に疑問を持ち始め、一九九九年頃から家族計画を実行するに至った。また、家庭内暴力に抵抗するようにもなつていった。

S村の女性たち自身は、このような変化を「私は変わった」、「もう昔の私ではない」という言葉で表現し、その変化を「とても良いこと」とプラスに評価した。私は、これらのプロセスをエンパワーメントのプロセスと結論づけ、「成果三類型」のモデルで示してきた(図2参照)。

以下では、このような女性個人や女性グループのエンパワーメントが対象社会のジェンダー関係にどのような変化をもたらしたのか示していく。

●対象社会のジェンダー関係の変化

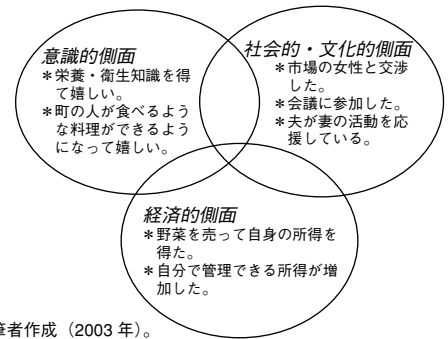
女性たちを取り巻く村落内外のジェンダー関係の変化は、①世帯内におけるもの、②世帯外におけるもの、③村落外におけるものに分類できた。

世帯内における変化には、(i) 男性パートナーとの関わり方、(ii) 子どもとの関わり方、(iii) 実母や義母との関わり方がある。

女性たちが市場に向き、自身で余剰野菜の販売を行うことを通し、「二人で働いて得た世帯の所得は自身も使う権利がある」と考え始める女性たちが出てくる中、「妻の方が信頼できる」と妻に所得の管理を全て任せる男性たちが出てきた。また、妻が外で働く際、妻が担ってきた再生産労働(食事の準備や後片付け)を担う男性も出てきた。妻の意見を聞き入れ、家族計画に積極的に関わる男性も出てきた。セクシユアリティのコントロールに関する力関係に変化が認められたといえる。

小学校を十分に終えていない女性たちは、プロジェクトで学んだ「栄養や衛生知識」を子どもたちに対して教えることで自信をつけていった。プロジェクトで活動する母

図3 エンパワメントの諸相



(出所) 筆者作成 (2003年)。

親を見て、「母親を尊敬できる」、「鼻が高い」と語る子どもたちも出てきた。また、これまで女兒の役割と考えられてきた料理やアイロン掛けを担う男児も出てきた。プロジェクトに関わった女性たちは義母や実母への態度を変化させ、子どもを授かることやその人数、子どもの数が多く子育てで苦労したことなどについて双方で話すようになっていった。また、これまで村の高齢の女性たちは、娘や息子のパートナーが村内や村外を歩くことを良しとしなかったが、女性たちの活動が村落社会の発展に貢献していることがわかると、女性たちの活動を支援し始めた。

次に、世帯外における変化では、(i) 異なった社会・経済階層の人々との関わり方、(ii) 村の政治を決定する機関でもある農協と女性の関わり方がある。

S村の女性たちが展開したミタイロガ設置・運営プロジェクトは軌道に乗り、後に女性たちの尽力により幼稚園として文部省に正式に登録され、村の多くの子どもと女性たちに便益が届くようになった。

未婚の母、内縁の妻といった社会・経済階層が低いとみなされてきた女性たちは、これまで子育てに追われ時間を捻出できず、生活改善プロジェクトに参加できなかった。また、既婚女性と未婚の母、内縁の妻との間には分断が見られた。しかし、子どもたちがミタイロガに通うことができるようになる、交流が生まれ、未婚の母や内縁の

妻たちもプロジェクトに積極的に参加し、このような女性たちが一九九九年以降、女性グループのリーダー格となっていった。女性たちのプロジェクトは高く評価され、二〇〇二年には同国内の新聞で取り上げられた。

男性の領域と考えられていた農協に入会金七万グアラニ(約三五ドル)を納め、年間五万グアラニ(約二五ドル)の組合費を支払い、正規の組合員になる女性も多く出てきた。この額は、村の男性にとっても容易に支払える額ではない。

また、二〇〇一年四月にはマリアが、男性の役目と考えられていた農協の役員候補に選出された。女性が村の政治を司る機関に関わることを村社会が認め始めたのである。

最後に、村落外におけるジェンダー関係の変化として、(i) 市場の女性たちや町の女性たちとの関わり方、(ii) 町の病院(関係者との関わり方、(iii) 市長との関わり方、(iv) 行政職員や国際援助実施機関の職員との関わり方)にも変化が認められた。村の女性たちは「自分たちが持ち込む野菜を町の人々が購入してくれるなど考えもしなかった」と述懐する。そこには町の人とカンペシーナ (campesina) 農村女性は、自身を卑下する時にしばしばカンペシーナという表現を用いてきた」という階層格差を自認している農村女性の姿が浮かび上がってくる。しかし、成功や失敗の経験を積

み重ねていく中で、「私はカンペシーナであるが、私にもできるのだ」と経済的側面のみならず、意識的側面、社会的・文化的側面においても自信をつけていった。S村の女性たちのエンパワメントは、これらの三つの側面が連関しながら現れていったといえる(図3)。

### ●開発プロジェクトにおけるエンパワメント評価

JICAでは現在、五項目評価(妥当性、有効性、効率性、インパクト、自立発展性)が行われているが、これまでに論じてきたような人々のエンパワメントの諸事象(多くは質的な側面の変化)を評価することは十分に行われてこなかった。

しかし、二〇〇四年にグアテマラやネパールなどにおいて「参加型開発のジェンダー評価」が実施されたり、ホンジュラスにおいて「ホンジュラス共和国地方女性の小規模起業支援プロジェクト」が展開されるなど、エンパワメントの諸事象を評価する重要な動きがある。今後も、人間の安全保障に重点を置き、対象地域の人々を中心に据えた開発がすすめられるならばエンパワメントの諸事象を評価の議論の俎上に乗せることは不可欠である。

エンパワメントを評価するためには、具体的には、①人々の意識や行動の変化を評価する、②評価の時間軸をより長く設定する、③戦略的利害関心の萌芽やこれまで

副産物として扱われてきた人々の意識や行動変容、社会変容を評価の対象にする、④対象地域の人々の実際の利害関心と戦略的利害関心の認識レベルに合わせて計画を立案し、中間評価などの段階で必要に応じPCM (Project Cycle Management) の変更を行う、⑤誰にとつてのエンパワーメントなのかを再考する、などが必要である。

⑤の誰のための評価か、という点であるが、開発援助実施機関にとつて妥当性があり、効率性を見出すことができたとしても、対象地域に無用な衝突を生み出すような開発目標や手法によりエンパワーメントを追求してはいけない。また、先進工業諸国／出身の介入者の価値観が、対象地域の人々の豊かさなどの概念を剥奪するような目標を設定することも問題である。近年、開発援助実施機関の説明責任が問われるからこそ、対象地域の人々の豊かさ感を尊重し、エンパワーメントといった質的なものを評価していく必要があると考える。

いうまでもなく人々のエンパワーメントの諸過程、換言するならば主体構築の諸過程を評価することは容易ではない。私たちの中には、女／男、農民女性／農民男性、役人／商人、妻／夫、など複数の主体がある。個人の中にある複数の主体は、状況に応じ、一つまたはいくつかが前景化したり、後景化したりする。それらは意識的に行われる場合もあれば、半意識的な場合もある。また、無意識のうちに行われることも

あるだろう。このような複数の主体や、対象地域のリアリティの全てを開発プロジェクトの枠組みに反映させることは時間や予算などの制約から困難である。しかし、いくつかの主体に焦点を当てて事業実施・評価を行うことは可能である。

対象地域の人々の主体構築の諸過程の側面、例えばカンペシーナがエンパワーメントをして劣位の表象概念から解放されていく、その過程に焦点をあて、それをプロジェクトとして評価すること、現金を管理することができなかつた妻が管理を行えるようになっていくその変化の側面を評価することなどは可能であり、それは個人のエンパワーメントの目標であり評価の項目でもある。

### ●おわりに

対象地域の人々のエンパワーメントを外部者が評価することは容易ではないが、重要な点は対象地域の人々の尺度から開発事業の評価を考えていくことではなからうか。

本事例で見てきたように、対象地域の女性／たちが、自身の変化をプラスに評価するような出来事が起きると、それは個人／グループのエンパワーメントといえることができる。そのプラスの評価はしばしば外部者の評価軸とずれることもあるだろう。しかし、本事例のように、女性個人や女性グループのエンパワーメントが、パートナーの男性や高齢の女性たちの意識変革を促した

り、対象社会のジェンダー規範の変容を生み出したということは、コミュニティにジェンダー規範の変容が受け入れられたことになる。

したがって個人やグループ、コミュニティのエンパワーメントをプロジェクト目標に据えることは可能なのである。むしろ開発協力の最終目標は対象地域の人々のエンパワーメントにあるのではないだろうかと考える。当然のことながら、コミュニティは一樣ではない。そのため、誰にとつてのエンパワーメントなのかを個別具体的に議論することは必要である。

では外部者の位置付けはどうであろう。S村の事例のようなエンパワーメントの諸過程を経るためにはしばしば女性／男性自身が、自己の位置付けを相対化する作業が必要である。その作業は事象によってはしばしば困難を伴う。例えば、その事象が宗教や伝統、慣習により規定されている場合、内部者がその変革を行おうとすると、対象地域に摩擦を生み出したり、内部者自身が地域社会で生きにくくなったりすることがある。そのような場合、外部者の介入が意味を持つこともある。その際には、外部者がどのステージでどのような介入をなすべきか、対象地域におけるジェンダー関係を調査を通し丁寧に見ていくことが重要な点はいくつまでもない。

(ふじかけ ようこ／東京家政学院大学 助教授)